

研究主題 「生きる力」を育む生活科の創造  
—体験を重視し、言語活動の充実を目指した単元の開発—

佐賀市立若楠小学校 教諭 田中豊治

## 1 主題設定の理由

平成23年度より新学習指導要領がいよいよ全面实施となる。新学習指導要領では周知の通り、「生きる力」をよりいっそうはぐくむことを目指している。

生活科は今回(平成20年)、2回目の改訂を迎えた。しかし、平成20年1月の中央教育審議会答申において、生活科の課題について、「指定校の調査などによると、学習活動が体験だけで終わっていることや、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める指導が十分に行われていないこと」「表現の出来映えのみを目指す学習活動が行われる傾向があり、表現によって活動や体験を振り返り考えるとといった、思考と表現の一体化という低学年の特性を生かした指導が行われていないこと」「児童の知的好奇心を高め、科学的な見方・考え方の基礎を養うための指導の充実を図る必要があること」<sup>(1)</sup>などが指摘された。

これらの課題を受け、生活科の改善の基本方針の一つとして、「気づきの質を高め、活動や体験を一層充実するための学習活動を重視する。また、科学的な見方・考え方の基礎を養う観点から、自然の不思議さや面白さを実感する学習活動を取り入れる」<sup>(2)</sup>ことが提言された。さらに、改善の具体的事項では、「自分の特徴や可能性に気づき、自らの成長についての認識を深めたり、気づきをもとに考えたりすることなどのように、児童の気づきを質的に高めるよう改善を図る。その際、例えば、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動の充実に配慮する。」<sup>(3)</sup>と示された。このように、今回の改訂においても「気づき」に関わる事項が改善の大きな課題となっている。

以前は児童にとって、近所のおじさんやおばさん、お兄さんやお姉さんが先生であり、近くにある里山や空き地・池や堀や河川・海など、良質の体験ができる豊かな教材があった。ところが近年、社会の変化により、児童が体験する機会が奪われたり児童が体験できる環境が減少したりしている事実がある。児童にとって「身近な体験」の乏しさが浮き彫りになっていることがうかがえる。そのため、学校に寄せられた期待は大きい。

生活科の学習において、「生きる力」とりわけ「確かな学力」を育てていくためには、「体験の重視」と「言語活動の充実」が必要である。嶋野は、「気づき」の質を高めていく条件として「生き生きとした活動や体験をいっぱいさせること」「活動や体験を充実させた後に出てきた気づきを教師がつかむこと」「つかみ取ったこと(気づき)について、教師が意味付けや価値付けをしてあげること」<sup>(4)</sup>の3点を挙げている。このことから「体験の重視」と「言語活動の充実」は、生活科の学習を進めていく上で、「気づき」の質を高めていく両輪であると言える。

嶋野が言う「生き生きとした活動や体験をいっぱいさせる」ために、見付ける・比べる・たとえるなどの多様な学習活動の充実に配慮できる栽培活動に焦点を絞った。「ふしぎなたね」を得て、児童は夢膨らませ、栽培活動に熱中すると予想できる。一学期に行ったアサガオ栽培体験を生かし、正体の分からない作物を育てていく中で、児童は、間引きや害虫など様々な困難に遭遇すると考えられる。その一つ一つを克服していく中で、作物を育てる苦労やアサガオとの共通点や相違点に気付いていくと予想できる。そして予想した植物かどうか、一つ一つ丁寧に問題解決をしていく中で、学習の進め方も学んでいくと考える。予想した植物とは違う結果に驚きながら、児童は、最終的に、ささやかながらも収穫の喜びを味わい、満足感・成就感でいっぱいになると予想できる。指導の際は、「活動や体験を充実させた後に出てきた気づきを教師がつかむ」ため、日常の観察やワークシートの分析に力を入れ、日常の会話にも注意したい。また、発達の段階を考慮し、「つかみ取ったこと(気づき)」の話し合いでは、積極的に「意味付けや価値付け」をしてあげたり、言語

活動の充実に関心を配ったりしていきたい。昨年度は、なかなか数値で表せない「気付き」の深まりについて、視点を基に数値化することにより、数値の上昇で実証することができた。今年度は、昨年度の研究を基に、これからの生活科の方向を探る単元開発に取り組みたい。

以上の理由から、研究主題「『生きる力』を育む生活科の創造体験を重視し、言語活動の充実を目指した単元開発」を設定した。

## 2 研究の目標

良質な活動や体験をさせ、言語活動が充実するような手立てを取りつつ、「気付き」の意味付けや価値付けを行い、これからの生活科の方向を探るような単元開発に取り組む。

## 3 研究の仮説

生活科の飼育栽培単元において、児童の活動や体験を生かし、言語活動が充実するような手立てを取りつつ「気付き」の意味付けや価値付けを行えば、これからの生活科の一つの方向を示すような単元が開発できるであろう。

## 4 研究の内容と方法

### (1) 内容

- ① 体験を生かし、思いをふくらませるための単元の開発
- ② 言語活動が充実するような手立ての実証

### (2) 方法

- ① 児童の意欲をかき立てる魅力ある単元づくりに取り組む。  
(児童の体験を生かし、「ふしぎなたね」の実践を行う。)
- ② 言語活動の充実のため、視点として、比較・類推・関連付けに着目させる。
- ③ 話し合い活動やまとめる活動では、言語活動の充実のため、積極的に児童に関わる。  
(「気付き」の意味付けや価値付けを行う。)
- ④ 検証授業の分析及び考察を行う。

## 5 研究の実際

### (1) 単元(題材)名

「ふしぎなたねをそだてよう」 第1学年

### (2) 単元(題材)の目標

アサガオやその他の植物を栽培したときの経験を生かし、植物の変化や成長の様子に関心をもち、植物は生命をもっていること・成長していることや、植物を育てている自分のよさや成長をも気付くことができる。

( 内容項目 : (7)動植物の飼育・栽培 (9)自分の成長 )

### (3) 単元(題材)について

1年生の児童にとって、アサガオや今回「ふしぎなたね」として登場するラディッシュ(二十日大根)は栽培しやすく、短期間に姿を変化させるので視覚的に成長を感じ取りやすい植物である。しかも、咲く花を楽しんだり種を取るのを楽しむタイプと、根に食べられる部分を実らせるタイプ(根菜類)というように、両者は対照的な存在であり、児童は興味をもって栽培に取り組むと考えられる。

一学期に児童は2年生からアサガオの種をプレゼントしてもらい、全員がアサガオの栽培に取り組んだ。水をあげたりつるの世話をしたりして花を咲かせ、アサガオの花で作った色水で遊んだり絵を描いたり夏

休みの間も家で世話を続けたりと、存分にアサガオの栽培を楽しむことができた。夏休み中や9月にはアサガオの種取りも経験し、来年の1年生へプレゼントしようと準備することもできた。また、児童は今までに、全員がアサガオの他に植物を育てた経験があり、植物栽培への関心は高いと言える。

単元の指導に当たっては、導入過程において植物の名前を知らせず、「ふしぎなたね」という存在のまま出会わせる。児童は興味をもち、その正体を探ろうとするであろう。体験を生かし児童は自然にアサガオと比較し、「どんな花が咲くだろう。」「どんな実になるだろう。」と胸を躍らせながら栽培に取り組んで行くであろう。栽培の中で、「アサガオとは葉の形が違うな。」「種の色や形はよく似ているけれど芽や葉の形が違うからハウセンカではないな。」のような気付きについて、比較・類推・関連付けの視点から意味付けや価値付けを行い、実感を伴った理解を図り、科学的な見方や考え方の基礎を育てていきたい。また、花が咲かない植物もあることや土中に食べられる部分が育つことなど多くのことに気付かせたい。アサガオやハウセンカなどいろいろな植物と比較しながら観察したり教師や友達と学び合う“ひびきタイム”の中で考察したりしていく中で、自然の不思議さや面白さを実感させ「ふしぎなたね」の正体に迫らせたい。

#### (4) 単元の計画(全12時間)

次	時	児童の活動	学習内容と指導の重点	指導の視点
1	2時間	アサガオの後の植木鉢をどうするか考え、「ふしぎなたね」と出会い、種を観察する。	オリエンテーションを行い、児童の栽培意欲を高め、種の観察から正体を予想させる。 ○ 「ふしぎなたね」の観察・予想 ○ 「ふしぎなたね」の種まき	比較 類推
2	2時間	「ふしぎなたね」の発芽を喜び、その様子を観察する。	双葉の色・形・大きさなどをじっくりと観察させる。(順次、鉢植えさせる。) ○ 双葉の観察・予想	比較 類推
3	1時間	本葉が出て大きくなった「ふしぎなたね」を喜び、その様子を観察する。	本葉の色・形・大きさなどをじっくりと観察させる。(順次、鉢植えさせる。) ○ 本葉の観察・予想	比較 類推
4	2時間	鉢植えを行い、今後どうなるか予想し、「ふしぎなたね」の正体を考える。	今後の育ち方や正体の予想をさせる。 ○ 鉢植え ○ 今後の育ち方や正体の予想	比較 類推 関連付け
5	3時間	観察や気付きから話し合いを進め、「ふしぎなたね」の正体を知る。(本時10/12)	話し合いを重ねながら正体に迫らせる。 ○ アサガオやハウセンカとの違い ○ 土の中(根っこ)への着目	比較 類推 関連付け
6	2時間	今までの活動を振り返り、「ふしぎなたね」を育てた自分のよさや成長に気付く。	最後まで「ふしぎなたね」と関わらせる。 ○ 収穫の喜び ○ 食への感謝(生命)	比較 類推 関連付け

#### (5) 単元の評価規準

次数	内容項目	単元の評価規準
第1次から第5次まで	(7) 動植物の飼育・栽培 (9) 自分の成長	○ 育てている植物に興味をもち、進んで関わろうとする。(関) ○ 育てたことのある植物と比較し、育てている植物の正体を類推したりその理由を関連付けたりしていく中で、植物の成長の様子や植物に対する自分の願いを表現することができる。(思) ○ 植物の成長の様子や植物に関わってきた自分のよさや成長に気

		付く。(気)
第6次	(7) 動植物の飼育・栽培 (9) 自分の成長	○ 植物の変化に興味をもち、最後まで関わろうとする。(関) ○ 育てたことのある植物と比較し、育てている植物の正体を類推したりその理由を関連付けたりしていく中で、植物の成長の様子や植物に対する自分の思い、収穫の喜びや食への感謝の気持ちを絵や文で表現することができる。(思) ○ 植物が命をもっていること、その植物を食べていることに気付くことができる。(気)

(6) 本時までの経緯

○ 9月22日(水)…「ふしぎなたね」との出会い … (学年活動)

児童は一学期に全員がアサガオを育て、花を咲かせた。夏休み中は、各自家に持ち帰り継続観察を行った。しかし、夏季休業後帰ってきたアサガオの鉢は、花盛りのものもあれば土だけのものもあり、様々であった。前の週にアサガオの種取りを行い、今後、アサガオの鉢がどうなるか予想させた。そして涼しくなっていくと同時に種ができて枯れていくことを理解させておいた。

この時間は、空になった植木鉢をどうしたいか尋ねた。児童は全員が「植木鉢でまた、何かを育てたい。」というように答えた。ここで、教師から児童に、植木鉢で育てる「ふしぎなたね」をプレゼントした。児童は大変喜んだ。何の種なのか知りたがったが、「それは後のお楽しみ。」ということであえて名前を知らせなかった。教師は、「この種がどうなってほしいの。」と尋ねた。児童からは次の五つの願いが出された。

- ◎ 何か分からないけれども、きれいな花が咲いてほしい。(42%)
- ◎ 「どらえもん」や「ぶたのたね」・「ジャックと豆の木」みたいに、自分の願いが叶うようになってほしい。(42%)
- おじぎ草かもしれない。保育園で育てたから。(3%)
- チューリップのように春にきれいな花が咲くとうれしいな。(3%)
- 何か分からないけれども、花が咲く仲間じゃなくて何か他の物かもしれないな。(10%)

デューイは、「問題意識をもつことができれば、問題解決の半分以上は終了している。」と語っている。夢や希望にあふれ、「ふしぎなたね」への期待がぎっしり詰まった願いである。

教室に帰った児童は、じっくりと種を観察したくさんのことに気付いた。観察シートに絵や言葉でまとめる際は、言語活動の充実のため教師の方で「アサガオの種と比較して書いてごらん。」と視点を示しておいた。児童がアサガオの種を手にした5月7日は、児童の気付きをまとめながら、観察の視点として、「色・形・大きさ・手触り(固さなど)」を教えた。児童が「ふしぎなたね」を手にした9月22日は比較を指示した。児童がアサガオの種の観察を行った日(5月7日)と「ふしぎなたね」の観察を行った日(9月22日)の見つけた視点の深まりを分析し表にまとめた。それが表1「種を観察した際に見つけた視点の変化」である。

表1 < 種を観察した際に見つけた視点の変化…色・形・大きさ・手触り(固さなど) >

見つけた視点の数 (個)	～1個	2個	3個	4個	5個	6個～	平均	アサガオな どとの比較
アサガオの種の観察 (5月7日)(32人)	4	5	7	5	7	4	3.7	1
ふしぎなたねの観察 (9月22日)(32人)	4	13	13	0	2	0	2.5	32

この表を見ると、種を観察した際に見つけた視点の数が減ったことが分かる。平均値は一人当たり3.7

個から2.5個へ減った。統計的に見ると「量的な伸び」がうかがえなかった。これはアサガオの種を手にしたときの気付きでは、「～みたい」という形にこだわった気付きが多く、形だけで何個も書いていたためである。図画工作科の見立て遊びのような気付きである。アサガオの種は形がおもしろく、見る方向によっていろいろな見え方ができる。「たとえば」表現させるには最適な教材である。それに対し、「ふしぎなたね」の方はアサガオとの比較でまとめたため、大きさや色・形について一つずつの記述が多かったためである。

そこで、「量的な伸び」だけでなく「質的な伸び」の分析も行った。「比較」である。アサガオなどとの比較を行った児童は、1名から32名へと大幅に伸びた。観察シートにまとめる際に、視点を指示したためである。この比較という手法は、教科は異なる(拙稿では社会)が、次のような利点がある。「比較しながら学習していく中で、共通点や相違点を見付けることができる。」<sup>(5)</sup>

そこで、「質的な伸び」を、ある児童の記述(気付き)の変化で表す。

(アサガオの種を手にしたときの気付き)… 5月

「ふくろをふるとおとがする。つきのかたち。においがしない。みんなおなじかたち。」



(「ふしぎなたね」を手にしたときの気付き)… 9月

「アサガオのたねよりふしぎなたねのほうがちいさかったよ。アサガオのたねがくろくて、ふしぎなたねがちやいろだったよ。アサガオのたねとふしぎなたねは、どっちともかたかったよ。」

上記抽出見は、アサガオとの相違点(大きさ・形)の他にアサガオとの共通点(固さ)まで記述している。このように、アサガオの種と比較したことで、「ふしぎなたね」の記述(気付き)がより深まったと言える。

ここで、教科書の図鑑のページでいろいろな植物の種見ていた児童が「ふしぎなたねはハウセンカのたねに似

ている。」と発言した。この発言を受け、数名が教科書の写真と見比べた上で、「ふしぎなたねの正体はハウセンカかもしれない。」と予想した。そこで教師は、「花の仲間だね。ハウセンカだといいいね。」と伝えた。



写真1 カップでの種まき



写真2 「ふしぎなたね」の間引き

種まきを行う際、考えたことがある。植木鉢にはまだアサガオが花を咲かせている児童もいる。そこで、カップに種をまくことにした。この方法は、次の2つのメリットがあった。1つは、児童の状態に合わせた対応ができたことである。アサガオの栽培体験があるため、児童は自分で種まきや水やりなどのお世話をし、「ふしぎなたね」の観察ができた。児童は、最後までアサガオの観察を行いつつ、「ふしぎなたね」の観察ができた。そしてアサガオが枯れてきたらアサガオにお別れをして、カップの「ふしぎなたね」を植木鉢に植え替えていく。この方法で順次、植木鉢はアサガオから「ふしぎなたね」へと替わっていった。児童の状態やニーズに応じた対応ができる方法であると考えた。

2つは、カップは身近に置いて観察が容易であったことである。写真1「カップでの種まき」では、双葉

や本葉の観察がしやすいことが想像できるであろう。また、大きな植木鉢とは異なり持ち運びしやすく、手元に置いて観察できる点で便利であった。そのため、生活科の時間でなくても朝の時間や休み時間にもお世話ができるし、観察したり気付いたりできた。この方法は、理科の発芽対照実験へも相通じる物があり、将来きっと生きてくると考えた。

さらに、アサガオの植木鉢を使ったので、種取りの際こぼれ落ちたアサガオの種が次々に発芽した。その度に間引きをして児童はアサガオを持ち帰る。また、植木鉢の近くにおしろい花の大きな株があり、10月になるとこの種が植木鉢の上にこぼれ落ち、最大で3種類の芽が出ているという不思議な現象も起こった。この「ひこばえ」とも言うべきアサガオの芽は、「ふしぎなたね」の芽と自然と比べる契機となった。写真2「ふしぎなたねの間引き」は、「ふしぎなたね」の間引きの様子であるが、児童は、間引きの際にアサガオの芽と「ふしぎなたね」の芽との違いを再確認する機会となった。

○ 9月28日(火)…「ふしぎなたね」の芽が出たよ

この日、「ふしぎなたね」の芽の観察を行った。種の観察時と同じように、観察シートに絵や言葉でまとめる際は、言語活動の充実のため教師の方で「アサガオの芽と比較して書いてごらん。」と視点を示しておいた。児童がアサガオの芽の観察を行った5月27日は、児童の気付きをまとめながら観察の視点として、「色・形・大きさ・手触り(固さなど)」を再確認した。児童が「ふしぎなたね」の芽を観察した9月28日はアサガオの芽との比較を指示した。児童がアサガオの芽の観察を行った日(5月27日)と「ふしぎなたね」の芽の観察を行った日(9月28日)の見つけた視点の深まりを分析し表にまとめた。それが表2「芽を観察した際に見つけた視点の変化」である。

表2 < 芽を観察した際に見つけた視点の変化…色・形・大きさ・手触り(固さなど) >

見つけた視点の数(個)	～1個	2個	3個	4個	5個	6個～	平均	アサガオなどとの比較
アサガオの芽の観察(5月27日)(32人)	5	5	16	8	0	0	2.8	7
ふしぎなたねの観察(9月28日)(32人)	3	11	11	5	2	0	2.8	28

この表を見ると、芽を観察した際に見つけた視点の数がほぼ変わらないことが分かる。両方とも平均値は一人当たり2.8個である。アサガオの芽の観察では「量的な伸び」がうかがえなかったものの、「ふしぎなたね」

の芽の観察では微増であり、「量的な伸び」がうかがえた。「比較」という手法に慣れてきたのかもしれない。

た、アサガオの芽の観察では、消しゴムなど身近な物と芽の高さを比べて観察していた児童も数名いた。また、観察眼に優れた児童は、「ふしぎなたね」の芽の根元の色にまで気付いており、正体を突き止める際の伏線にもなるので大いにほめておいた。

「質的な伸び」をある児童の記述(気付き)の変化で表す。

(アサガオの芽を観察したときの気付き)… 5月

「めが3つでたよ。おもてはつるつるだけど、うらはぎざぎざです。」



(「ふしぎなたね」の芽を観察したときの気付き)… 9月

「ふしぎなめはアサガオのめとくらべて、小さくついろはおなじいろでした。かたちははあとで、アサガオはちょうちよみたいでちがいました。はは、ふたばでした。」

上記抽出見は、アサガオとの相違点(大きさ・形)の他にアサガオとの共通点(色・双葉)まで記述して

いる。このことから、アサガオの芽と比較したことで「ふしぎなたね」の記述(気付き)がより深まったと言える。アサガオとの相違点(大きさ・形)やアサガオとの共通点(色・双葉)については、ほとんどの児童が気付いており、「比較」という視点を入れることで「知的な気付き」の質を高めていくことができるということが分かった。

○ 10月4日(月)…「ふしぎなたね」の本葉が出たよ

この日「ふしぎなたね」の本葉の観察を行った。種の観察時と同じように、観察シートに絵や言葉でまとめる際は、言語活動の充実のため教師の方で「ふしぎなたねの双葉と比較して書いてごらん。」と視点を示しておいた。今回はアサガオとの比較でなく、「ふしぎなたね」の双葉と本葉との比較である。児童が「ふしぎなたね」の双葉の観察を行った日(9月28日)と「ふしぎなたね」の本葉の観察を行った日(10月4日)のつけた視点の深まりを分析し表にまとめた。それが表3『「ふしぎなたね」の双葉と本葉を観察した際につけた視点の変化』である。

表3 く 「ふしぎなたね」の双葉と本葉を観察した際につけた視点の変化」

つけた視点の数(個)	～1個	2個	3個	4個	5個	6個～	平均	双葉と本葉の比較
双葉の観察 (9月28日)(32人)	3	11	11	5	2	0	2.8	28
本葉の観察 (10月4日)(32人)	3	7	10	5	6	1	3.2	32

この表を見ると、本葉を観察した際につけた視点の数が増えていることが分かる。平均値は一人当たり2.8個から3.2個へと増えたのである。写真1のようにカップの中で、双葉も本葉も観察できたのが大きい。「ふしぎなたね」の本葉の観察では、「量的な伸び」がうかがえた。このことから、「知的な気付き」の質を高めていくためには、「比較」という手法を使えば、かなり効果があることが実証された。

「質的な伸び」をある児童の記述(気付き)の変化で表す。

(「ふしぎなたね」の双葉を観察したときの気付き)… 9月

「めが出たよ。さわったらおもちのようにべたべたしてきもちよかったです。アサガオよりもふしぎなたねのほうがちいさいよ。」



(「ふしぎなたね」の本葉を観察したときの気付き)… 10月

「本ばが二つ出たよ。まえのふたばよりも本ばがとともやわらかかったです。まえのふたばとちがって本ばはぎざぎざしていたよ。本ばは、ミントにしています。」

上記抽出児は、「ふしぎなたね」の双葉と本葉の相違点(大きさ・形)で、特に本葉の形に興味をもち、「ミント」という名前まで調べ、記述している。このように、「ふしぎなたね」の中の双葉と本葉の様子を比較しての記述(気付き)がより深まったと言える。「ふしぎなたね」の中の双葉と本葉との相違点(大きさ・形)や共通点(色・双葉)については、ほとんどの児童が気付いており、「比較」という視点を入れれば「知的な気付き」の質を高めていくことができるということが分かった。

その後、見通しをもって栽培活動を続けさせたかったので、「今は本葉よりも双葉が大きいけれど、この後どうなるだろうか。」と質問を投げかけた。児童は、「本葉がどんどん大きくなる。」と予想した。

○ 10月13日(水)…「ふしぎなたね」の正体予想2回目

この日「ふしぎなたね」の正体について話し合った。この種と出会った日、児童は5つ予想した。

- ① はながさくといいな。
- ② ゆめの木になるといいな。
- ③ おじぎそうかな。
- ④ ちゅうりっぷかな。
- ⑤ なにかほかのものかも。

②は、「なん日もたつのに、「ジャックとまめの木」のように大きくなるので、どうもちがうようだ。」とまとまった。③は、「は



学級の3割が「花の仲間」、7割が「その他のもの」と予想して楽しみにしているものの、10日ほど前から冷え込みが厳しくなり、根っこが赤くふくらんでいる植木鉢はわずかである。「ふしぎなたね」の正体が分かって収穫までかなり待つことになる。本時では、「ふしぎなたね」の正体を明かさないことにした。実は本時の前日にドラマがあった。昼休み、「ふしぎなたね」のお世話をしていたA子が、「先生、『ふしぎなたね』の根っこが赤くふくらんでるよ。」と驚いた様子で教室に飛び込んできた。そこでA子に記録を書かせておいた。

本時はどちらなのか自分なりに予想させ、そう予想した理由まで考えさせた。ペア学習で意見交流した後全体会で話し合わせた。児童から出た理由は主に次の4つである。

- |                                 |
|---------------------------------|
| ◎ 花の仲間だと考えた理由                   |
| ・ 教科書に載っていない花が咲くと思うから。          |
| ・ 花には虫が寄ってくるけど、「ふしぎなたね」も虫が来るから。 |
| ◎ そのほかのものだと考えた理由                |
| ・ 草に似ているから草の仲間ではないだろうか。         |
| ・ よく分からないけれど、花の芽ではないと思う。        |

話し合いの終盤に予想させてみると6割が「花の仲間」、4割が「その他のもの」と変わってきた。一年生なりに考えているようである。ここでA子に発表させた。『「ふしぎなたね」のはっぱが、にんじんみたいにふえたよ。うれしいです。にんじんのなかまかな。』教師の方で、「葉っぱの着き方が似ているんだね。」と補足する。本日最後の予想をさせるとA子の発表が効いたのか、3割が「花の仲間」、7割が「その他のもの」と逆転する。しかし、B子が遅れて振り返りカードを持って来て発表する。「わたしは、にんじんのなかまだとおもいません。わたしは、にんじんをみたことあるからです。けど、ほかのものとおもいます。」ここで時間となる。答えははっきりとは出なかったが、C子の振り返りカードには、次のように書かれていた。

『「ふしぎなたね」はまだまだわからない。さいしょはほうせんかだとおもったけど、つぎはちがうはな。つぎはにんじんと、つぎつぎかわるから『ふしぎなたね』なんだね。まだまだなにがさくかわからない。だから、なにがでるか、たのしみだなあ。』
---

探究への飽くなき意欲を大切にしていきたい。

○ 10月29日(金)…「ふしぎなたね」の正体予想4回目

あらかじめ用意しておいた植木鉢を見せた。「わーっ。」という声。児童の視線が「ふしぎなたね」の根元に集中する。あちこちで「赤いよ。」「やっぱりふくらんでるよ。」などの声が挙がる。

ここで、「ふしぎなたね」の正体予想をさせると、根元の色や形から児童は次の4つを予想した。

4つの予想で違うと思う物を理由まで付けて発表させた。4つとも以下の理由で違うということになった。

- |        |                                    |
|--------|------------------------------------|
| ① いちじく | ①は、実が木になるので、どうも違うようだ。              |
| ② たまねぎ | ②は、色が違う(茶色の皮に包まれていない。)ので、どうも違うようだ。 |
| ③ おいも  | ③は、つるが出てこないの、どうも違うようだ。             |
| ④ なす   | ④は、実が土の中にはできないので、どうも違うようだ。         |

「違っていたけど、『ふしぎなたね』の仲間かもしれないのはどれ。」と尋ねると、即座に「②と③。」理由は、「土の中に実ができるから。」更に「根の下はどうなっているだろう。」と問いかけると、「ふくらんでいるのかな。」「見てみたい。」という返事が多く持ち主のD男さんにぬいてもらうこととなった。D男さんが「えいっ。」とぬくと、きれいな赤かぶが顔を出した。前よりも数段大きい「わあーっ。」という声。「やっぱりふくらんでいるよ。」という声が挙がった。ここで「ふしぎなたね」の正体を知らせた。こ

の日2名の児童が二十日大根を抜いて持ち帰った。それからは、大きくなれば抜いて持ち帰らせている。みんなにここに顔である。

## 6 研究の成果

「ふしぎなたね」との出会いでは、児童が大いなる希望をもって「ふしぎなたね」を受け入れ、しっかりとした問題意識をもって取り組むことができた。一人一人の手に「ふしぎなたね」が渡り、種をまくところから問題意識をもって取り組むようになる。また、9ページのC子の振り返りカードには、問題解決が一つ終わるとすぐに新たな問題が出てくる様子が書かれている。理想的な問題解決が行われた証である。

このことから、良質な活動や体験をさせ、言語活動が充実するような比較・類推・関連付けなどの手立てを取りつつ「気付き」の意味付けや価値付けを行った「ふしぎなたね」の実践は、これからの生活科が目指す「生きる力」を育む单元であると言える。

飼育栽培单元は自然が相手だけに、天候の不順などで計画がずれることがある。総合的に考えて、今回は、答えを出すのを一週間ずらすという教師の判断で乗り切ったが、「啐啄の機」を見計らって臨機応変に対処することの必要性を改めて感じた。

また、カップで種を発芽させたり比較・類推・関連付けなどを行ったりして考察することは、対象を科学的に見ることの素地を養うことにつながり、将来、理科の学習にもつながっていくことと信ずる。

## 7 今後の課題

今回の单元開発では、飼育栽培单元に焦点を絞った。次は、他の領域でも单元開発をしたい。最後に児童の振り返りを載せ、論の終わりとしてほしい。

このかぶはどんなあじがするのかな。サラダにしようかな。じぶんでつくったから、おいしいごはんになるよ。きょうはごはんがたのしみだなあ。 (女子)

### 《引用文献》

- (1)(2)(3) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 生活編』 平成20年8月 pp. 3-5 日本文教出版
- (4) 嶋野 道弘 「新学習指導要領がめざすもの—生活・総合的な学習の時間編」  
『新学習指導要領がめざすもの』 2009年 pp. 12-15 日本標準
- (5) 拙稿 「問題を捉え、追求していく学習過程の工夫  
—比較を通し、地域や人々の生活を見つめ考察する子どもの育成を目指して—」  
『統計情報2008年』 2008年2月 全国統計協会連合会

### 《参考文献》

- ・ 拙稿 「体験を生かし、気付きを深める生活科の学習  
～「ふしぎなたね」の実践を通して～」 2009年 佐賀市教育研究所